

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
東日本大震災・復興支援関連研究（共同研究型）
2014年度研究経過報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名			
	観光学部・教授		橋本俊哉 印			
研究課題	観光資源の持続的活用による風評被害の克服に関する研究－福島県北塩原村を事例として－					
研究組織	所属研究機関・部局・職		氏名			
	文教大学 国際学部 教授		海津ゆりえ			
	京都嵯峨芸術大学芸術学部 教授		真板昭夫			
	福島大学 共生システム理工学類 教授		黒沢高秀			
研究期間	2013 年度		～	2015 年度		
研究経費	2013 年度		2014 年度		2015 年度	総計
	(上段:支出金額)	2,679,989	2,960,000			5,639,989
	(下段:採択金額)	2,680,000	2,960,000	2,950,000		8,590,000
		円	円	円		円

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

福島県および調査対象地である北塩原村の公的機関、観光関連事業者等18件に対する聞き取り調査を行い、昨年度調査以降の風評被害の状況変化等の把握を行った(研究A)。また、文献調査・村民への聞き取り調査・踏査を行い、見出された村の資源や魅力をフェノロジーカレンダーと資源マップにまとめ(研究B)、その成果をふまえて観光者参画実験(モニターツアーと交流会)の企画・実施と評価を行った(研究C)。昨年度末に村内全世帯主を対象として実施した意識調査については、地域に対する住民のコミュニティ意識や風評被害に対する意識等の視点から分析作業を進めた(研究D)。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[北塩原村] [風評被害] [宝探し]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

① 北塩原村における風評被害の現状と関連既存調査資料等の収集・分析 (研究 A)

2015年2月25～26日および3月2～5日に、福島県および北塩原村における風評被害の状況変化に関する追跡聞き取り調査が計18か所を対象にして実施され、前回調査時(2013年9月および11月)からの風評被害の回復状況等が把握された。この調査結果は現在分析中であり、来年度に報告の予定である。

② 資源掘り起こし(「宝探し」)調査(研究 B)

文献調査、北塩原村住民を対象とした聞き取り調査、現地踏査等を通じて、同村大塩地区および北山地区の資源を掘り起こした。その成果をもとに「フェノロジーカレンダー(季節の自然・生活文化の暦)」と大塩地区の里山を舞台とした「資源マップ」を作成した。

<フェノロジーカレンダー>

6月21日(北山地区)と6月22日、8月10～12日(大塩地区)において実施された聞き取り調査等から見出され、フェノロジーカレンダーとしてまとめられた主な資源は以下の通りである。

- ・「稲作(米)」や「畑作物(アスパラガス、キュウリ、カボチャ等)」
- ・「山菜(ワラビ、タケノコ、ナメコ等)」
- ・「木(栗、柿、クルミ等)」
- ・「花(リンドウ、ニッコウキスゲ、菊)」
- ・「年中行事(正月の餅つき、薬師祭り、温泉神社祭り等)」

<資源マップ>

8月12日と9月15日に大塩地区の里山を踏査し資源をリストアップした。大塩地区の資源マップ上に解説文とともに記載された主な資源は下記の通りである。

- ・「植物(杉並木、ケヤキ、栗、ワラビ等)」
- ・「生活・作物(大久保集落、花豆、枝豆等)」
- ・「歴史(温泉神社、長泉寺、柏木城跡等)」
- ・「眺望(大塩宿、棚田の風景等)」
- ・「湧水等(くだ沼、水洗い場等)」

③ 観光者参画実験(研究 C)

住民、調査補助で参加した学生、裏磐梯エコツーリズム協会等が協同し、研究 B で作成されたフェノロジーカレンダーや資源マップを活用しつつ、ウォーキングコースや体験プログラムを企画した。

特に本年度は、調査対象とする村の中でも観光のウエイトが高い「桧原・裏磐梯地区」の住民に対して、農業が盛んで歴史・文化資源も豊富な「大塩地区」が備える魅力を理解してもらい、さらには将来において村内の交流を活発化させることも意図して、大塩地区を舞台とするエコツアーに着目し、大塩地区の特色である「恵まれた自然環境」と「食の魅力」を十分に活用した、秋の田園風景や里山の魅力、歴史等を満喫できるコース設定が妥当であると判断された。その結果、学生たちのアイディアを活かしたツアータイトル(「うんめえところ、まるごといただきます。里山さ行くべ!大塩探訪」)を掲げ、里山ウォーキング(前半 10:00～12:30)と昼食を交えた交流会(後半 12:30～14:00)から成るエコツアーが企画された。

このツアーはモニターツアーとして、9月28日に「裏磐梯エコツーリズムカレッジ」との共催の公民館支援事業として実施された。参加者はチラシで事前募集された北塩原村の住民と勤務者の計6名であった。ツアーのガイドは2名の裏磐梯エコツーリズム協会会員が、サポートスタッフは本プロジェクトチームの教員と学生16名が担当した。これと並行して、住民と学生らが交流会の準備として地元の食材を活かした料理を作り、ウォーキング終了後にはツアー参加者とスタッフら全員がともに食事を交えた交流会を開催した。

ツアー終了後に参加者側からのアンケート評価を集計した結果、ツアーの内容・魅力や催行のし方等、全般に渡って高評価が得られた。特に「地元の食材による料理」や「大塩の住民や学生との交流」等に満足したことが指摘されたほか、「北塩原村の魅力をもっと知りたくなった」等のコメントも得られた。一方のスタッフ側からは、「見どころが豊富で飽きることのない、秋のどかな山里の雰囲気になれるコース」であることが指摘され、食事の内容やツアー設計、料金設定等についても高い評価が得られたほか、「道路沿いのコースが狭く、車の通行や騒音でガイドの解説に集中できなかった」点や、昼食の準備量、ガイド進行のペース等の課題も抽出された。

以上の結果より、本エコツアーの実施は、大塩地区の様々な魅力を北塩原住民に(再)認識してもらうために有効な取り組みであることが示され、今後もツアーの改善と定番化を図るために必要とされる知見が得られた。

研究【経過・成果】の概要 つづき

④北塩原村住民を対象とした意識調査(研究 D)

2013 年度末(2014 年 2 月)に、研究プロジェクト期間における北塩原村住民の意識変化を検証することを目的として郵送調査法による第 1 回質問紙調査を実施した。調査対象は村内 1087 戸の全世帯主で、273 名からの調査票が返送・回収された(回収率 25.1%)。今年度は、回収された調査票から、無効回答や記入漏れ等のあるものを除いた有効回答 238 名を分析対象とし、その内容の分析を行った。

調査結果の概要は以下の通りである。

1. 回答者の基本属性

回答者の主な属性を挙げると、性別の内訳は男性 83%、女性 17%、年代については割合の高かったものから、60 代 32%、50 代 30%、40 代 15%、70 代 13%と、比較的高齢の者が多かった。また、村内の居住地は、北山地区 37%、桧原地区 33%、大塩地区 23%とこれら 3 地区が大部分を占めており、職業については多岐に渡るものの、農林漁業 21%、無職・専業主婦 19%、宿泊業 16%、製造・卸売業 12%、公務員・団体職員 9%、建設業 7%の割合が高かった。

2. 北塩原村住民の「コミュニティ意識」

質問紙中の主な調査項目として、北塩原村住民が風評被害に直面し、そしてその問題を克服していく過程の背景にある意識変化の指標として、「コミュニティ意識尺度(石盛, 2010)」を一部修正して用いた。この尺度に含まれる下記の 4 因子(各因子 5 項目、5 件法)の尺度得点はそれぞれ 5~25 点の範囲をとる。全体としては、自らの地域を愛し、積極的・自発的に地域活動へ関わっていこうとする傾向がやや強く表れているといえる。

- ・「愛着因子(自らが住む地域へ抱く誇りや愛着)」: $M=16.9$ 、 $SD=3.7$
- ・「連帯・積極性因子(積極的に他の住民と協力し地域のために活動しようとする態度)」: $M=17.4$ 、 $SD=3.8$
- ・「自己決定因子(住民自らが決定権を持って地域を改善していこうとする態度)」: $M=19.2$ 、 $SD=3.2$
- ・「他者依頼因子(行政や他の熱心な人々に地域の問題解決を任せようとする態度)」: $M=13.9$ 、 $SD=2.8$

※ 参考文献: 石盛真徳(2010)『コミュニティ意識と地域情報化の社会心理学』ナカニシヤ出版

3. 北塩原村に対して抱く「イメージ」

2. と同様に、住民の意識変化を把握する補足的な指標として、住民が北塩原村に対して抱いているイメージを SD 法で測定することを試みた。このイメージは、「評価性」、「活動性」、「力量性」の 3 側面から把握され、それぞれには 5 項目・5 件法の質問が含まれている。その結果の概要を述べると、住民全体として、「評価性イメージ」については中間よりもわずかにポジティブ寄りのイメージが、「活動性イメージ」についてはわずかに非活動的なイメージが、「力量性イメージ」については両極に偏らずに中間的なイメージが抱かれていた。

4. 風評被害に対する意識等

以上のほかにも、風評被害の問題に対する意識のあり方を尋ねる質問項目(6 問、5 件法、得点範囲は各 1~5 点)を作成した。具体的には、「震災後に風評被害が発生したことに関する事実認識($M=4.5$ 、 $SD=0.7$)」、「現在もなお風評被害が残っていることに関する事実認識($M=4.1$ 、 $SD=1.0$)」、「風評被害の問題に対する関心($M=4.2$ 、 $SD=0.9$)」、「風評被害が自身の生活へ及ぼしている影響($M=3.5$ 、 $SD=1.2$)」、「風評被害克服に関する将来展望($M=3.3$ 、 $SD=1.1$)」、「風評被害克服に自身が貢献できるかの見通し($M=3.2$ 、 $SD=1.0$)」である。風評被害の問題は住民にとって明確に認識され、現在も関心を集めているといえるものの、その克服への展望に関しては、必ずしも明瞭な見通しが持っていないことが示されている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・ 橋本俊哉 (立教大学)・海津ゆりえ (文教大学)・相澤孝文 (立教大学)「東日本大震災における観光の風評被害に関する研究—福島県北塩原村の「風評手控え行動」の分析を通して—」、立教大学観光学部紀要、第 17 号、2015 年、pp.3-12.

④ その他 研究補助者 (学生) によるポスター・口頭発表

- ・ 坂巻杜登 (立教大学)、山内しおり (文教大学)「エコツーリズムを通じた風評被害の克服に向けて 福島県北塩原村におけるエコツアー『里山さいぐべ!』の実践と評価」、第 6 回全国エコツーリズム学生シンポジウム・ポスター発表 (主催: NPO 法人日本エコツーリズム協会)、2014 年 11 月 29 日、於: 東京大学
- ・ 内倉綾香 (立教大学)、瀬脇ひかり (文教大学)「北塩原村大塩地区におけるエコツアーの実践と評価—風評被害の克服に向けて—」、裏磐梯ビジターセンター第 10 回学生研究発表会・口頭発表 (主催: 裏磐梯ビジターセンター自然体験活動運営協議会)、2015 年 3 月 19 日、於: 福島県耶麻郡北塩原村